

創造から新天新地へ—24章でたどる神の救済史

14章 「初めにことばがあった」

ヨハネの福音書1章

1. はじめに

(1) これまでの流れ

- ①マタイの福音書は、旧約の約束がイエスにおいて成就したことを示す。
- ②その最初に置かれているのが系図である。
- ③現代の読者には退屈に見えがちである。
 - *救済史の流れに関する無知が存在する。
 - *アブラハム契約、ダビデ契約、新しい契約に関する無知が存在する。
- ④系図の内容は、ユダヤ人にとって、神学的・契約的意味を持つ宣言である。

(2) ヨハネの福音書の特徴

- ①「地から天を見上げる」共観福音書とは異なる。
- ②「天から地を見下ろす」視点で書かれている。
- ③キリストの出来事の背後にある霊的意味が啓示されている。

(3) ヨハ1:1~18のキアズム構造

- A 永遠のロゴス (1~2)
- B 創造主 (3)
- C 光と闇 (4~5)
- D 証言 (6~8)
- C' 拒絶と受容 (9~13)
- B' 受肉 (14)
- A' 神の完全啓示 (15~18)

永遠の神が、私たちが新しく造るために来られた。

「まえがき」に見られるキアズム構造の内容がそれを示している。

I. A 永遠のロゴス (1~2節)

Joh 1:1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

Joh 1:2 この方は、初めに神とともにおられた。

1. 「初めより前におられたお方」

- (1) 「初めに」 = 創1:1以前

(2) ことば=ロゴス(メムラ)=神の自己表現

①ことばは、神と区別されつつ神である。

②三位一体の神の啓示が見られる。

2. 神学的意味

(1) 創造以前の永遠性が示される。

①ことばは永遠に存在しておられる。

(2) 新創造の起点が示される。

①すでに存在するものの改良ではない。

②創世記1章に対抗する新しい創造である。

*光が創造された。

*光そのものが来られた。

II. B 創造主なるロゴス — 万物の源 (3節)

Joh 1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。

1. すべてを造られたお方

(1) 一切の存在はこの方による。

①この方は、創造主であって被造物ではない。

②三位一体による創造がなされた。

(2) 創造の栄光が示唆されている。

①ここに再創造(救い)への伏線が張られている。

III. C 光と闇 — いのちの勝利 (4~5節)

Joh 1:4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。

Joh 1:5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。

1. 闇に打ち勝つ光

(1) いのち=神のいのち(ζωή)

①このいのちが人の光となる。

(2) 光と闇の対比

①闇は光に打ち勝たなかった

②十字架に至る霊的戦いの予告

③終末的勝利の予告

IV. D 証言 — 光を指し示す声 (6~8節)

Joh 1:6 神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。

Joh 1:7 この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった。

Joh 1:8 彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来たのである。

1. 「光ではなく、光を証しする者」
 - (1) 神から遣わされた人ヨハネ
 - ①彼の使命は証言することである。
 - ②奉仕者のモデル
 - (2) 神は証言を通して働かれる。
 - ①信仰は証しから生まれる。

V. C' 拒絶と受容 — 光への応答 (9~13節)

Joh 1:9 すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。

Joh 1:10 この方はもともとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。

Joh 1:11 この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。

Joh 1:12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。

Joh 1:13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

1. 不信仰と信仰の対比
 - (1) 「受け入れなかった世と、受け入れた者たち」
 - (2) まことの光が世に来た。
 - ①世は知らなかった。
 - ②イスラエルも拒否した。
 - ③しかし、信じた者は神の子とされた。
2. 新生は神による。
 - (1) 証言は人間の役割である。
 - (2) 再創造は神のわざである。

VI. B' 受肉 — 幕屋を張られた栄光 (14節)

Joh 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

1. 「神が人となられた」
 - (1) ことばは肉となった。
 - (2) 「住まわれた」 = 幕屋を張られた。
 - ① シャカイナグローリーの帰還
 - ② エデン → 幕屋 → 神殿 → キリスト
 - ③ 新天新地 (新しいエルサレム) への接続

VII. A' 神の完全啓示 — 父を解き明かす御子 (15~18節)

Joh 1:15 ヨハネはこの方について証して、こう叫んだ。「『私の後に来られる方は、私にまさる方です。私より先におられたからです』と私が言ったのは、この方のことです。」

Joh 1:16 私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた。

Joh 1:17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。

Joh 1:18 いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである。

1. 「神を解き明かすひとり子の神」
 - (1) ヨハネの証言による永遠性の再確認
 - ① 恵みの上にさらに恵み
 - ② 律法と新しい契約の対比
 - (2) 「説き明かされた」
 - ① 神の最終啓示が与えられる。
 - ② 新天新地に至る啓示の完成が予告される。

結論：今日の信者への適用

- (1) 見るべき方：ニュースではなくロゴス
 - ① 情報の洪水の中で「初めに」へ立ち返る。
 - ② 人類が抱える問題は今も変わらない。

(2) 立つべき場所：闇ではなく光の中

- ①光と闇の戦いは、最終的に十字架と復活において決着している。
- ②闇を力でねじ伏せるのではなく、光の側に立ち続けるよう招かれている。
- ③「闇はこれに打ち勝たなかった」という宣言を信仰告白とする。

(3) 果たすべき役割：結果ではなく証言

- ①奉仕者は「目立つ人」ではなく、「キリストを見えるようにする人」である。
- ②伝道の結果は主に委ねる。

(4) 生きるべき身分：神の子ども

- ①自分の価値を成果で測らない。
- ②「子として受け入れられている」という福音の身分から一日を始めよう。

(5) 目指す終着点：新天新地の完成

- ①受肉は、終末の完成（新しいエルサレム）へ続く「臨在の回復」の始点。
- ②信者は、完成を待つ者として、今を整える。
- ③「最後は栄光で終わる」という確信が、今日の恐れと疲れを小さくする。